

【ねがいましては】

平成29年6月25日
第320号

KYOWA SCHOOL

「2ヶ月の夏休み」

6月のある新聞、「2ヶ月の夏休み」とスタートする記事が載っていました。この待遇を受けるのはフィンランド、公立小中学校の先生方のお休みです。当然職業としては人気の部類に入るそうで、大学の教員養成学部の競争率は10倍を超えるそうです。ある郊外の中学校、職員室にはソファが並び和やかな雰囲気が漂っているとのこと……。

午後2時半頃には授業は終わり、2時間ほどかけ翌日の準備をすると家路につくそうです。

部活動はなく、生徒は地域のスポーツクラブなどに通うそうです。

一方日本の中学校では、6割の先生が「過労死ライン」を越えて残業に携わります。ここで大切なのは、学校の先生方が忙しいということは、それに比例して児童生徒たちも忙しいということ。つまり子どもたちも「過労死ライン」であること。

中央教育審議会では、「働き方改革」の中で、部活の朝練禁止や夜間の電話を留守電に切り替えるなど、教員たちの長時間勤務解消へ乗り出しています。それでも、午後8時までに全員退勤にまではほど遠いのが現実だそうです。

と言いながら、時期学習指導要領では小学校3年生から英語が始まります。しかし他教科の学習量は減りません。授業時間をどう捻出するかは学校任せになっているそうです。

最後に記事はこのように結びます。

◆国際学力調査の成績でフィンランドを上回る日本。「教育先進国」をアピールするには、先生がゆとりを持てる環境づくりが先決だろう◆

子どもたちがゆとり教育を受けたことで、国際学力調査の成績が下がった、だから脱ゆとりの道を取りながら、今度は教員たちが過労死寸前だから教員たちにゆとりを与える……。大きな矛盾が立ちはだかっている現実があります。

学校の先生方は、今や壊れる寸前……では子どもたちはどうなのか、壊れそうな先生方と毎日顔を合わせ、授業を行う教室をご想像いただきたいのです。

国際競争に負けないように教育の質を高める……。そのように政治家や企業のトップの方々はお考えになっているのかもしれませんが、それに呼応するかのように保護者の方々も「それ行くぞー」と、子どもたちをあおる。気がついたら「家族」を感じさせるような時間がどこにもなくなっていた……。戸籍上は家族であっても、こころ上は……。

その部分を今一度見つめ直すことが大切だと思います。

家族で囲む「団らん」。家族で楽しむ「休日」。家族で楽しむ「……」。何でも結構です。家族がひとつになって時間を過ごすこと、それが欠落してしまっている現状。

学校の先生方にも家族がいらっしゃいます。先生方は家族らしい時間を過ごされているのでしょうか。先生方のお子さんたちはご両親といっしょに家族らしい時間を

過ごせているのでしょうか。先生方も「ひと」、そのお子さんたちも「ひと」……。

毎日勝つことだけのために時間を費やす子どもたち……。ここに通う子どもたち(中学生)に訪ねます。「中学へ行って、まさかこんなはずではなかったのに、と、思うことありますか。」私が驚いたのは、「定期テストの成績を必ず顧問の先生に見せなければなりません。悪いと呼ばれられるんです。」

部活動で時間を奪いながらも、さらに成績にまで干渉してくる……。これって囚人扱い？

子どもたちよ、なぜ声を上げないのですか。自分から選んだ道だから仕方がないのですか。周りが皆そのようにしているからですか。周りが皆、同じことをしていれば変わったこととして感じられないのですか。

信号機が赤なのに、周りの人たちが皆、無視をして渡ってしまえば自分も渡るのですか。

たった一度の自分の人生、フィンランドの先生方や子どもたちは2ヶ月の夏休みを利用して、様々に人生を送っています。これからどう羽ばたこうか。どんな人生が待っているのだろうか。世の中にはどのような風景が広がっているのだろうか。豊かさって何なんだろう。ものが溢れていることなのかなー、いや、そうでもなさそうだな。だって、あの夏休みに行ったときのあの風景、こころから豊かだなーって感じたものな。家族全員で囲んだ夕食は格別だったなー。僕も将来はそんな家族を持ちたいなー。

慎ましくていい、質素でいい、あれがほしいこれもほしいと、物や結果ばかりに執着している時間をもったいない。こころの中にあたたかいものが流れる時間を楽しもう。それにはそばにお父さんがいて、お母さんがいて、おじいちゃんおばあちゃんがいて、きょうだいたちがいて、ペットがいて……。みんなが一緒にいるときに「しあわせ」を感じる時なんだね。

たった一度の中学生生活、たった一度の小学生生活、たった一度の高校生生活、何かひとつでも家族とのあたたかい思い出をお持ちになっていますか。本当の豊かさを見つけてみませんか。